

令和元年6月19日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02760

研究課題名(和文) 対面状況のコミュニケーションで観察されるモダリティ形式の基礎的研究

研究課題名(英文) A Preliminary Research on the forms of modality expressions observable in face-to-face communication

研究代表者

澤田 茂保 (Sawada, Shigeyasu)

金沢大学・外国語教育系・教授

研究者番号：00196320

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は話しことばにおける日本語と英語のモダリティ表現を対応関係について、とくに場面でリアルタイムに進むときに観察されるモダリティについて比較することであった。申請時の計画では英語訳が存在する現代日本語小説をデータとするとした。しかし、実際に比較調査を行うと小説データは素材としては不適であった。そのため日本アニメ映画の海外版DVDを利用することに方針を変えた。アニメ映画の台詞は確かに創作であるが、リアルタイムで進む現実に関わりなく似せた場面状況が存在するので、場面に即して日英の表出パターンを比較することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

モダリティは意味論的に普遍的なカテゴリーであるが、その顕現形式は各自然言語の文法構造的制約を受けており、その結果、英語では法助動詞研究が主流となり、日本語では動詞付加辞論に傾斜する。本研究では十分に解明に至らなかったが、モダリティは、命題情報を担う内容語核に対して、機能語連鎖の文法化現象の一つとしてとらえられる可能性を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to compare how modality expressions are used in real-time interactions in Japanese and English, thereby making explicit the patterns of modality expressions in the two languages. In the original research plan, I first considered analyzing the parts of conversational interactions used in some of the Japanese-English contemporary novels. However, in the process of investigation, I realized it was not very appropriate to depend on written materials, even if it is conversational parts in novels. Therefore, I have shifted to the use of English expressions that are dubbed to commercially available Japanese-original animations. Indeed, the scripts in animations are fabricated. But they are taking place in situation in which people are talking in real-time progressions. Therefore, I have successfully compared the patterns of modality expression between the two languages.

研究分野：英語学、英語教育

キーワード：モダリティ 話しことば

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

英語によるコミュニケーション能力の養成が英語教育の目標となって久しい。その目標変化の過程で文法教育を軽視する傾向が強まっており、文法不要論が英語教育者にさえ存在する。その理由の一つは、従来の英語文法は書きことば(written language/WL)に根拠をおいた文法論であり、その文法を話しことば(spoken language/SL)を教える時代に無批判に教えるようにすると当然齟齬があるからである。その結果、話すときは文法はいらない、といった考えに陥りがちになる。この考えは誤っており、外国語教育で文法が不要となることはなく、どのような文法が必要なのか、ということが課題である。

このような現状認識のもと、SLの観察に根拠をおいた文法論を構想したいと考えて、英語のSLの特徴について研究をすすめて来た。SLの特徴として、WLには理論的に存在しないか、あるいは存在しても顕著ではないものがある。その一つが文構造の断片化である。構造の断片化には、様々な原因・理由があるが、モダリティの概念が関わっている、と思われる事例がある。次例で見てみる。

(1) a. "I used to be a bank teller, hard to believe, I know."

b. I know that it is hard to believe that I used to be a bank teller.

(1a)は、ラジオドラマの台詞で、勤務評価の悪い部下に対して銀行支店長が対面で諭す場面の発話である。ほぼ同じ意味内容を、文構造を定期的に(学校文法的に)構成したものが(1b)である。(1b)と比較すると、(1a)では、定期的な節構造が断片化して、順序を変えて出現している。下線の命題部に対して、話し手の認識に関わる表現"hard to believe"や聞き手に向けた対人的な表現"I know"が断片化していることが分かる。前者は主観的モダリティに、後者は対人・間主観的モダリティに対応する。

学校文法的な構造がSLで変化して現れるこういった断片化の現象等について、モダリティの関与という観点から説明できるのではないかと思った。それが研究を開始した背景である。

2. 研究の目的

英語における本流的なモダリティ論は基本的にモード(written/spoken)の相違を考慮せず、ある意味で言葉が実際に話される場面・文脈から切り離して、センテンスレベルでの形式と意味の対応研究が主である。引用事例が小説類の対話場面から取られることが多いのは、法助動詞が関わる微妙な意味上の差違が単純な作例からは読み取れないからである。モードの相違は議論の中にはない、といってよい。

本研究では、話し手と聞き手が対面してリアルタイムで進行する双方向的なインタラクションという発話状況で、モダリティがどのような現れをしているか、また、それが構造上の変化とどのような関係があるか、といった点から考察することを目的にしている。

3. 研究の方法

2で述べたように、本研究では、現実場面での双方向的なインタラクションに近いデータに基づいて、モダリティの現れ方を探求するので、可能な限り実際の対面の発話資料を利用することが望ましい。しかしながら、英語に関しては日本国内でそのような理想的なデータを集めることは非常に困難で、また倫理上の問題を回避することも難しい。従って、本研究では、英語のラジオドラマの台詞を音声越しにデータ・ベースを作り、それを資料とした。

他方で、英語のモダリティ論は歴史的・学史的な経緯から法助動詞論に傾いているので、英語のモダリティ論だけを根拠に、双方向インタラクションでのモダリティを分析しようとする重要な点を見誤る可能性が懸念される。通常の英語モダリティ論では表現主体の事態認識が中心だが、話し手と聞き手が双方向的に関係し合う話しことばでは、これだけでは一面的である。双方向インタラクションでは、話し手が聞き手にどう伝えるか、聞き手がどうとらえるか、といった面も考慮しなければならない。英語のモダリティ論の枠組みがSLに発生する様々な特徴に十分対応できないと考えられたので、日本語との比較を取り入れることとした。日本語のモダリティ論では、聞き手を眼前においたときの発話での伝達の仕方等の枠組みを発達させているからである。

当初の計画では英語翻訳がある現代日本語小説中の対話部分のやりとりに焦点を当てて、両言語でのモダリティの顕現化を比較しようと考えた。しかしながら、実際に日本語現代小説とその英語翻訳を比較しても、かりにそれが対話場面での表現であっても、リアルタイムで進むやりとりとは言えない場合が非常に多いということがわかった。やはり書かれた場合は会話部分であっても、説明的になり、現実場面よりも冗長な表現形式になっていると思わざるを得ない事例ばかりであった。そのため書かれたものをデータとすることはあきらめて、その代わりに、日本語のアニメ映画を利用した。日本語のアニメは海外への浸透度が高く、英語の吹き替え(dubbing)がついている。その吹き替えは、英語字幕(subtitle)よりもリアルタイムでのSLの特徴を示している。吹き替えは現実の場面で採取したデータとは違うが、映像を伴った場面に即した表現となっており、リアルタイム的に進むインタラクションの日英比較が可能となるデータである。

4. 研究成果

研究の主な成果

澤田茂保(2017)では、英語のラジオドラマからのデータ・ベースを作成し、それに基づいて英語の話しことばの断片化とモダリティの関係を考察した。

WLを根拠にした文法から見ると、SLの構造は崩れた(あるいは異なった)印象を与える。その一つに構造の断片化がある。断片化は現象としては多様だが、主節構造の「分離」あるいは主節構造の一部もしくは全部の「欠落」によって、文法構造的に十全ではない形式で出現する現象である。分離による断片化とは、主節-従節の構造関係が絶たれて、主節部が何らかの機能を担う符牒表現化したり、それと随伴して従節部が独立化するという現象である。他方、欠落による断片化には、副詞的従属節に関わるものと状況省略により機能語類の消失が起こって残余部が断片化する現象などがある。

分離による断片化の事例を考察すれば、モダリティ表現に対応するものが断片化する傾向がある。例えば、I would say ..., I 'd say..., I say ...; I tell you..., I 'm telling youなどの発話遂行・伝達の動詞の1人称主節は容易に断片化する。

(1) a. More than your fair share, a great deal of illness, I 'd say.

b. Impressive, I must say.

c. ... For all the world to see, I 'll make them all two feet tall. Two feet tall, I say.

d. I 'm all right, I tell you.

(2) a. But I 'm telling you it ain 't fair.

b. Don 't laugh at me, I 'm telling you.

これらは命題的情報に対する話し手の確信の度合いに関係しており、モダリティとして見なせるものである。これを日本語に字句通りに訳すことは不自然である。日本語で同じ機能を持つモダリティに相当する表現、例えば、「...ですよ」、「...だよ」、「..だってば」のような口語表現とするのが自然である。

澤田(2017)では、こういった主節部の断片化について、人称と動詞類型に分けて網羅的に考察した。一人称及び二人称の一定の動詞類の主節断片は、話し手の発話時点での心的態度を表しており、それが命題的情報のユニットと意味的な断層を生むため構造的に断片化することを示した。

このような表現類は、英語においては、冒頭部に生じる内容語1語を含む機能語連鎖である。これらは場面における発話機能に応じて、繰り返し使われるので、それが結果的に発話・談話における機能的な役割を担うようになっていいると考えられる。ここには文化化との平行性が認められる。

澤田茂保(2019)では、日本のアニメ映画作品(2016年に日本公開、北米では2017年公開の映画『君の名は』)を素材に、日本語の話しことばのモダリティ表現類が英語の吹き替えでどのように表現されているかという視点で日英を比較した。

英語のモダリティ論は法助動詞論に傾斜していると述べたが、日本語には英語法助動詞に対応する統語的カテゴリーがない。従って、直接的な比較はできない。他方で、日本語には、膠着型言語の特徴として、動詞への非自立的な付加辞が発達している。動詞付加辞は、英語では機能語類の語順・構造変化に依る文の表現類型に関与したり、命題的情報に対する話し手の評価・認識のあり方や命題情報の伝え方に関わるものが多い。そのため、日本語では、非自立的な動詞付加辞の体系的な説明を求めて、モダリティの概念を拡張・発展させているといえる。

日本語台詞に現れるモダリティ表現を契機に、英語の吹き替えにおいて何らかの対応形がないか、といった単純な観点から日英を比較してみたところ、表現類型の軸のモダリティについては、各言語で基本的な表現類型は同じなので、おおむね対応関係が観察される。しかしながら、日本語でモダリティ表現とされるものには、英語において形態的に対応形を見いだすことは困難な場合がある。おそらく、何らかの対応があると思われるが、個別言語の仕組みに依存しているのではないかと思う。

例えば、英語で全く形態的に対応形が存在しない「~のだ/んだ」のような例がある。このモダリティは、英語では具体的な語彙形態というよりも、語順などの変化で応じているように思われる。

(3) a. 「3年前、お前はあの時、...俺に会いに来たんだ!」

b. “Three years ago, you showed up. It was... to see me.”

(3a)は日本語の台詞で、(3b)はその英語吹き替えである。(3b)は、It was to see me that you showed up three years ago といった分裂文を下にしており、語順が変化している。また、日本語に顕著な「聞き手への伝え方」についても、単純な形式比較によって対応形を見いだすことは困難であった。「聞き手への伝え方」を全く欠く言語はないと思われるので、程度の違いはあるにしろ、おそらく日本語と英語では具現の仕方が異なるからであろう。例えば、「丁寧さのモダリティ」は日本語では動詞付加形式で具現されるが、英語での丁寧さは音調も含めた言語全体の仕組みの中で具現されると思われる。

澤田(2019)では、逆に、澤田(2018)で指摘した英語のモダリティ表現を吹き替えのスク립トから抽出して、それが日本語でどのような表現に対応しているかを観察した。

- (4) a. “Oh, I see you actually bothered to do your hair today.”
(「三葉、今日は髪ちゃんとしとるな」)
b. “You know, I gotta say you two make a great couple.”
(「あんたたち仲いいなあ」)
c. “I had feelings for him, you know, the way he’s been recently, I mean...”
(「好きだったんだ。ここ最近の瀧くん。」)
d. “Katsuhiko, tell me, what do you think you’re doing?”
(「克彦! お前、なにやとるんや!」)

英語のモダリティの表現は、(4)のように、字句通りに日本語になっておらず、場面で適切な日本語モダリティ表現となっている。また、一般に、付加疑問文のタグは、対面での会話でしか発生しないが、あまり多用されるものではないことが観察された。他方、文末の right? や huh? は、ほぼ同じ機能を持ったものとして比較的多く使われている。これらは音調保存の形式に近いものである。

以上のような成果の発表を学会や紀要への論文投稿によって行った。

得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

本研究では、英語における SL の断片化の要因としてモダリティの文法化という点を指摘し、また、日本語のモダリティ論の枠組みを援用して、英語の話しことばでの表現具現を分析した。実際のところ、モダリティの対応については、各言語の言語的な特徴の制約を受けており、語彙/形態的な対応で見ることは適当ではない。むしろ、機能語連鎖といった機械的な概念による分析がモダリティの形式を背後で支えるキーであると考えられる。このようなモダリティ分析の視点は、今後の日英のモダリティ研究に一つの方向を与えるものであると言える。

今後の展望

モダリティは、言葉によって伝えられる事柄から、命題的な情報を引いた部分としてとらえることができる。命題的な情報は、内容にかかわることで、一つ一つの発話では固有で新規の情報である。他方、それが現実の場面で話し手から聞き手に伝えようとするときに、モダリティがつきまどってくる。これは繰り返し発生するパターンとして定型化できるものである。そのため、一般に機能語連鎖としてとらえられる。

英語の場合は、文頭に現れやすく、日本語の場合は、文末に現れやすい。今後は、モダリティを単なる表現レベルの比較ではなくて、内容語と機能語の対比と関連させて、言語の仕組みそのものの解明につなげることが期待される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

・澤田茂保(2019)「日本語と英語のモダリティ表現の対応について - 話しことばの文法論の視点から」言語文化論叢 23号、43-72

・澤田茂保(2017)「Spoken Englishにおける構造的な特徴について 断片化の諸相」英語語法文法研究第24号、開拓社、PP.39-54

〔学会発表〕(計1件)

・澤田茂保(2016)「Spoken Englishにおける構造的な特徴について」英語語法文法学会第24回大会シンポジウム『Spoken EnglishとWritten Englishを巡って』、奈良大学、10月

〔図書〕(計2件)

・澤田茂保(2017)「はなしことばと断片的表現 Not XP について」中村芳久教授退職記念論文集刊行会(編)『ことばのパースペクティブ』所収、pp.307-318

・澤田茂保(2016)『ことばの実際 I 話しことばの構造』シリーズ英文法を解き明かす 9巻、研究社

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。